

## 『ミルトン』の序歌について ——ブレイク受容の一断面

新 見 肇 子

ウィリアム・ブレイクの後期預言書と呼ばれる作品の一つ『ミルトン』は、おそらく1803～1808年の間に書かれ、銅版画として彫版された(Bentley 308)。さらに刷られて、出版されたのは、1810年か1811年初めと推定されている(Essick and Viscomi 38)。現在、このようにして出来た4冊(部)が残っており、コピーA、B、C、Dと呼ばれている。コピーによって、銅版画の枚数は異なるが、45～50枚から成っている。A、Bという二つのコピーは同じだが、後の二つのコピーCとDではかなりの加筆修正がある。例えば、「序」(Preface)はコピーCとDからは削除されている。最も忠実に原版の銅版画を再現しているプリンストン版テキストは、コピーCを使用し、「序」は補遺にに入れてある(37-8)。

1800年9月、ブレイクは、パトロンとなったウィリアム・ヘイリーの招きで、初めてロンドンを離れ、サセックス州の海岸に面したフェルパムという村に住む。この間に、後の預言書群を書き始めていたと推定される。古典主義者であったこのパトロンとの関係は、次第に悪化していき、ついに1803年9月、ブレイクはヘイリーのもとを離れてロンドンに帰る。この3年間のフェルパム滞在が、『ミルトン』という作品にも影響を与えていることは想像に難くない。例えば、作品中に登場するサタンは、ヘイリーであるというような個人的なレベルでの読みも可能である(Essick and Viscomi 14-5)。

作品のモットーとして、ジョン・ミルトンの『失樂園』(*Paradise Lost*)か

## 2 新見肇子

らの引用、「神の道の正しきを人に説く」(‘To Justify the Ways of God to Men’) が置かれているように、作品中にこの偉大な詩人が登場し、語り手である詩人ブレイクとともにその精神的再生が果たされる。

本論では、このような作品の「序」にある4連からなる詩を独立した作品(以下序歌と記す)として読む。第一の理由は、1916年、この序歌が、『ミルトン』という作品から切り離され、Hubert Parry (1848–1918) という作曲家によって曲が付けられ、歌われるようになったということである。合唱曲になったこの詩は「エルサレム」(‘Jerusalem’) というタイトルが付けられ、さまざまな組織や団体によって歌われ、英国国教会の賛美歌にもなった。特に作曲された当初は、愛国主義的な組織と婦人参政権運動という、いわば左右両派がそれぞれ自分たちの運動の精神をよく表わしている歌として取り上げた。第二の理由として、先に述べたように、ブレイクはある段階から「序」を削除した。これが『ミルトン』という作品全体と必ずしも有機的に結びつくものではないと判断したと考えられる。これは、消極的な理由かもしれないが、この短い詩を作品全体と切り離して読む可能性を示唆している。

本論の第Ⅰ部では、序歌の読解を試みる。先行する散文とともに、この詩が意味するところを明らかにする。第Ⅱ部では、この序歌が賛美歌として歌い継がれ、体制派と反体制派それぞれに領有されていった過程を追い、この詩が持つ特質を明らかにする。

### I

序歌の前にある散文の序の主旨は、以下ようになる。ホメロスやオウィディウス、プラトン、キケロらの古典作品は、すべて聖書から盗用され、それを歪曲したものである。シェイクスピアもミルトンも「愚かなギリシアやラテンの剣の奴隷となった詩人から感染し、広まった病によって制限されている。」<sup>1</sup> しかも、今、軍隊、宮廷、大学にもこの古典を信奉する輩が跋扈し、精神の戦いを抑圧し、物質的な戦いを長引かせようとしている。

破壊を唯一の喜びとする彼らを阻止するよう、詩人ブレイクラしき語り手は、画家、彫刻家、建築家などの芸術家に立ち上がるよう呼びかける。そして彼らの想像力とは、「主なるイエスにおいて、われわれが永遠に生きる世界」のことであり、この想像力に忠実であれば、ギリシアやローマの手本はいらない。ここに見られるブレイクの古典文学批判は、18世紀から文学、絵画、建築を席捲していた当時の古典主義に対する批判にもつながる。それは「序」の中で、古代ブリテンが深く関わっているとする聖書の優位性の主張と結びつく。<sup>2</sup>

序歌の内容を、第一連から見ていく。

And did those feet in ancient time,  
Walk upon Englands mountains green:  
And was the holy Lamb of God,  
On Englands pleasant pastures seen!

最初の2行、「あの足は古き昔に／イングランドの緑の山の上を歩んだか」は、突然話の途中から始まっているかのように、「そして」(‘And’)という歌い出しだが、先行する散文の序の続きであるとすれば、「あの足」の「あの」は、散文の序の最後にある「われらが主イエス」(‘Jesus our Lord’)を指す(Bateson 8; Goslee 107)。ただし、この2行の最後は、疑問符でなくコロンの終わっている。ブレイクの句読点には、一般的に変則的なものがあるかなりあり、また2行目の‘Englands’も、普通なら、‘England’s’となるところである。構文的・内容的にこの2行は、疑問文と解釈できるが、純粋な疑問というだけではなく、かつてそうだったことがあるのか、という「驚き、衝撃、不信」をも表わしていると指摘する研究者もいる(Ferber 83)。その意味では、疑問符が付いていないことも理解できる。

次の2行、「そして聖なる神の子羊の姿は／イングランドの心地よき牧草地に見られたのだろうか」は最後に感嘆符が付いている。内容的には、初めの2行と同じで、神の子羊たるイエスが、かつてこの土地におられたのだろうかという驚愕に満ちた問いである。この問いは、聖なる存在を特

#### 4 新見肇子

定の時と場所の中に置いている点が注目される。はるか昔、緑豊かなこの国の田園に主なるイエスが現実存在していたという興奮が感嘆符に込められていると言える。ただ最初の2行と後半2行の違いは、前者では、イエスは、その足を下から仰ぎ見るような巨大な導き手、羊飼いであり、後者では、牧場で草を食む羊の群れの中にいる、おとなしい子羊のイメージである。イエスの重層性が示されている。

この語り手の問い、特に初めの問いに現われるイメージは、Nancy Goslee を初め、多くの研究者が指摘するように、いくつかの伝説や聖書中の故事に基づいている。一つは、旧約聖書イザヤ書の中の「シオンの歌」(49: 14-52: 12) である (Goslee 108)。荒れ果てたシオンがかつての力を取り戻し、エルサレムが輝く衣をまとうようにと神自らがシオンに帰還する、と「よい知らせを伝えるもの」が予言する。牧羊者キリストがかつてイングランドの美しく輝く山野を歩いたというブレイクの2行のイメージは、イザヤの語るシオン回復の描写に依拠しているのは確かであろう。古代イスラエルのシオンと古代イングランドとキリスト(イエス)がパラレルに結びつけられていることの意味は、最終連のところでもた論じたい。

次にこの最初の2行は、グラストンベリ修道院にまつわるアリマタヤのヨセフ伝説にも依拠していると考えられる (Goslee 109; Essick and Viscomi 214)。12世紀、William of Malmesbury という修道士が、グラストンベリの修道士団に依頼されて、『グラストンベリ修道院古史』を書いたが、これがのちに大幅な改竄を経て、いくつかの伝説が出来上がった(青山 42-56)。その一つは、アリマタヤのヨセフが伝道者としてグラストンベリを訪れた時、すでにここに神(キリスト)自身によって建てられた教会を発見し、やがてこの修道院の開祖となったというものである。アリマタヤのヨセフというのは、新約聖書の4福音書やいくつかの外典の中に、わずかではあるが言及されている (Matthew 27: 57-60) アリマタヤ市の裕福なユダヤ人参事会議員で、かねてからキリストに好意を抱き、その処刑後、ローマの総督ピラトから遺体を請けて十字架から降ろし、友人ニコデモの助力を得て

これを葬ったことが伝えられている。その彼が、キリストの弟子の一人ピリポとともにガリアからついにはブリタニアに伝道したというとても面白い話が出来上がった(青山 84-7)。<sup>3</sup> やがてイングランドの守護聖人から国家的聖者にまで押し上げられたヨセフとイエスをめぐるさまざまな伝説の虚構性(青山 126-7)は近代になって明らかになったが、文学においては、ブレイクの前にはエドモンド・スペンサー、後にはアルフレッド・テニスンなどによって、国民的アイデンティティを確認する対象として、ヨセフの神話化がはかられた(青山 135-6)。大事なことは、アリマタヤのヨセフの種々の伝説において、キリストに直接関わりがあったとされるユダヤ人とブリテン(イングランド)が結びつけられ、その最初とされる修道院に権威が付与されたことである。ブレイクの序歌は、この伝説を取り入れることによって、キリスト教世界におけるイングランドの優越性と正統性を示唆していると言える。

三つ目の典拠として、17、8世紀の神話学者が想定した、「大西洋黄金時代」(‘Atlantic Golden Age’)というのがある(Goslee 109)。すなわち北ヨーロッパ、とくにブリテンの神話や巨石文化と旧約聖書の創世記とを融合しようとして措定された時代である。ノアの洪水以前の文化は、彼の息子や孫たちによって上記の居住可能な場所へ伝えられたという。これに関しては、F. W. Bateson (9) やゴスリー (109) が指摘するように、詩人ミルトンも、『アレオパジティカ』の中で、「ピタゴラス派やペルシャの知恵」も起源はドルイド教や古代ブリテン人にあるという説を支持している(339-40)。この「大西洋黄金時代」も、イングランドと古代ユダヤの密接なつながりを示し、「古き昔」、キリストがこの世にいた時代以前から、イングランドは、ヘブライの歴史の中枢において関わりがあり、キリスト教の栄光と権威に与かっていることを主張する。先述したように、後半の2行は、前半の2行における偉大な導き手であるキリストに対して、やがてこの世の罪を負ってほふられる神の子羊イエスが示される(Goslee 111)。そしてもう一度イングランドという呼称が繰り返される。

And did the Countenance Divine,  
 Shine forth upon our clouded hills?  
 And was Jerusalem builded here,  
 Among these dark Satanic Mills?

この第2連は、第1連と形の上では対になっているが、2つの文末にはいずれも疑問符がついている。また内容的には大きな変化がある。遠い昔のイングランドに言及していた第1連に対して、この連では、現在のイングランドのことが述べられている。太古の楽園のような世界と著しい対照をなす、人の手が加わった景色が展開する。初めの2行、「あの聖なる顔がかつて／雲がたれこめるわが国の丘々に光り輝いたのだろうか」の、「聖なる顔」はイエスの顔で、1連にある足に呼応している。しかし、その場所は古への緑なす山ではなく、現在雲が垂れこめているイングランドの丘陵である。このような土地に本当にかつて輝く神の顔が見られたのだろうか、という語り手の驚きと懐疑が表れている。2行目の‘our’は「わが国の」あるいは、現在のわれわれの、つまり現代の、眼前に広がる、という風にも解釈できる。これは4行目の‘these’という言葉によって明確になる。‘[c]loured’は、4行目の‘these dark Satanic Mills’が、工場を意味すると考えれば、‘smoky’、煙の立ち込めるという意味にも解釈できる。<sup>4</sup> 心身ともに、人々を閉じ込め、窒息させるような重苦しい世界が現出している。人間の想像力を枯渇させる抑圧的な雰囲気も暗示されている (Goslee 112)。かつてのどかなイングランドの田園で見られたという聖なるイエスの存在を疑わしめる、イザヤ書の中の荒れ果てたシオンのような世界である。

都市化した19世紀初めのイングランドは、後半の2行でさらに鮮明に描写されている。「この暗いサタンの工場の間に」という、「この」は、産業革命後のイングランドにおいて、林立している工場を指していると解釈できる。これは、ロンドンではなく、北部工業都市に1800年の初めころまでに建てられた、黒煙を出す工場かもしれない (Ferber 84)。<sup>5</sup> Michael Ferber は、この‘Mills’について二つの可能性を指摘している。一つは、や

がて蒸気機関などにとって代わられる「風車や水車による製粉所 (flour mills)」、もう一つは、「夜空を運行する天体」で、ニュートンやロックが普及させた絶対的な自然の法則を象徴している (84)。ブレイクは『ミルトン』という作品の他の個所でも (3:2)、「Mills」という語を単純な運動を繰り返す水車場の意味で用い、機械的宇宙観や非生産的な思考を象徴させている (Barfoot 63-4)。従って、実際の工場ではなく、抑圧的な合理主義の象徴であるという解釈も可能である。いずれにしても、工場も新しい神の都エルサレムも、今や神ではなく、人間の手にその建設が委ねられていることが暗示される (Goslee 113)。この第2連では、人間の欲望が促進してきた産業文明あるいは合理主義によって、現代のイングランドが、過去の栄光を疑わしめるような状況に陥っていることが述べられている。それは、聖書の精神、すなわち想像力の源が枯渇し、無垢が失われた、経験の世界である。語り手の静かな怒りと嘆きが、繰り返される間に感じられる。

Bring me my Bow of burning gold;  
 Bring me my Arrows of desire:  
 Bring me my Spear: O clouds unfold!  
 Bring me my Chariot of fire!

第2連で今、ここ、すなわち当時のイングランドにおける荒廃、墮落の認識が示唆されていたが、この連では、それを打開、克服するための闘いを宣言する劇的な調子に変わる。‘Bring me’ (「私に持ち来たれ」) で始まる4つの命令文がたたみかけるように続く。戦いに必要な戦車と武器のイメージは、聖書やギリシア・ローマの古典から借りた、伝統的なものだが、その戦いは、ホメロスやウェルギリウスが描く、現世における物理的な戦争ではなく、聖書の世界が示す、精神の聖なる戦いであることが明らかになる。このようにギリシア・ローマ古典と聖書の両方に依拠する点は、ミルトンに倣っていると言える。一方、歴史的背景として、ブレイクが『ミルトン』を執筆したのは、ナポレオン戦争 (1796-1815) の真只中であつたという時代状況も想起される。

主として、ゴスリーに従って、2行目までのイメージの出典と意味を考える。まず、弓と矢を持った裸の美少年として描かれるキューピッド（ギリシア神話ではエロス）のイメージが指摘されている（Goslee 114）。1行目「黄金色に燃え輝くわが弓」（‘my Bow of burning gold’）はキューピッドの常套的な持ち物だが、2行目には「わが欲望の矢」という語句がある。物理的な武器ではなく、激しい欲望、意思が矢という武器だ、という隠喩である。すると燃え輝く（‘burning’）という前行の意味も弓の色や形状を示すだけでなく、強烈な願望と熱情が弓に譬えられていると解釈できる。恋愛を戦いと見るペトラルカのソネットにおけるように、語り手は、キューピッドになって、自らの激情、精神的エネルギーを武器として、精神の戦いを挑もうとしている。またここで描かれているイメージは、戦車を駆って、天空を渡る、ギリシア・ローマ神話の太陽神（sun-god）アポロ（あるいはハイペリオン）を想起させる（Goslee 115）。一方、太陽は光明を与え、すべてを白日の下に晒す啓蒙の働きも暗示する。

3行目の「わが槍」も太陽神となった語り手の精神的な力を同時に示している。また「雲よ、晴れよ」は、2連目2行目の「雲がたれこめた」に呼応して、魂の戦さに奮い立つ語り手が、暗黒をもたらす、抑圧的な諸勢力を雲散霧消させる決意を示していると考えられる。4行目にある「わが炎の戦車」については、先述したように、戦車は、古典文学や神話では、古代の戦さや競技を連想させるが、旧約聖書では、エリアやエゼキエルなどに現れる神の乗り物である。キューピッドやアポロのイメージは、人間世界と自然界のエネルギーを表象するが、これら旧約聖書に現れる戦車は人間に対する神の絶対的威厳と力を示すものである。この力は、破壊的であると同時に建設的なエネルギーである（Goslee 115-6）。例えば、ゼカリヤ書では、「二つの山の間から出てくる」4両の戦車が語られ（6:1）、「主は御足をもってエルサレムの東にあるオリーブ山の上に立たれる」（14:4）と、王国再建のための戦闘的な神の帰還が予言されている（Goslee 116）。この予言は、ブレイクの序歌の第4連で語られる、歴史的な時と場所にお



けるエルサレム再建のヴィジョンと重なる。

次に、戦車のイメージの出典としてよく指摘されるのが、ミルトンの『失樂園』第6巻において天使ラファエルがアダムに語る天上の戦いの場面である (Goslee 117; Essick and Viscomi 214)。サタンの軍勢との戦闘の3日目に、神は救世主である御子キリストを遣わされる。御子は自ら戦車 ('The Chariot of Paternal Deity') を駆り、いかずちをもって敵陣の中に乗り込み、抵抗するすべを失ったサタンの軍勢を天の城壁まで追い詰める (VI 748–59)。『失樂園』第12巻において、天使ミカエルは、救世主の最後の審判に続き、「この地上がすべて楽園となる」未来を語る。こうした文脈におけば、ブレイクの詩における「炎の戦車」は、キリストによる救済という神の力の顕現を象徴していると言える (Goslee 117–8)。第4連で述べられる、すべて楽園となった地上におけるエルサレムの建設は、第2連で示された現実世界の墮落を正し、新世界を打ち立てようとする破壊による創造であり、それは、ブレイクが考える想像力のヴィジョンと言える。彼が1820年ころに作成したと推定されている『ラオコーン』 (*The Laocoön*) という一種のアフォリズム集の中に、例えば、「旧約及び新約聖書は芸術の偉大な規範である」 ('The Old & New Testaments are the Great Code of Art')、あるいは「イエスとその使徒および弟子はみな芸術家だった」 ('Jesus & his Apostles & Disciples were all Artists') (Erdman 274) という格言がある。キリスト教と芸術を同定する、ブレイクの独特の芸術・想像力に関する考えである。

第3連の1行目にある、'Bow' は、聖書に現れる「虹」 ('rainbow') を意味する、とゴズリーは詳しく説明している (119–20)。その理由は、第2連の垂れこめた雲と雨の連想およびブレイクの『最後の審判の幻想』 (*A Vision of the Last Judgment*) 中にある炎の戦車とノアの虹への言及による。また創世記において、神はノアと息子たちを祝福し、契約を立て、そのしるしとして「雲の中にわたしの虹を置く」 (9: 13) と言う。この虹は、神の栄光を反映し、来るべき洪水という破壊的な正義を示すシンボルであると同時に、

その洪水を終わらせて、生き物の価値を肯定する恩寵でもある。虹は、創世記では終末までの自然の秩序の維持を約束し、最後の黙示録では、その秩序の変化そして終末の合図となっている。第3連において、語り手は、古典文学の太陽神と同時に聖書の神のように、破壊と創造の闘いを決意している。

ブレイクが挿絵を描いた、トマス・グレイのオード『詩の発達』(*The Progress of Poesy*) には、「弓の射手である太陽神ハイペリオン」、あるいは「戦車を駆るミルトン」が登場する。ブレイクはこれを念頭に置いている可能性がある (Bloom 910; Goslee 121)。そうだとすれば、語り手は、やはり詩人の想像力を神聖な力になぞらえている。そして第3連は、詩人の戦い、つまり想像力の発現を示唆していることになる。

この連の性急で、激烈な語り手の要求に対する答えは示されていない。3行目の「雲」は、暗黒によって人間の自由や進歩を阻害し、神の姿を覆い隠すと同時に、上述した聖書の中の戦車と嵐が結びつけられているように、神の出現を必要とする危機的状況を暗示する。しかし、雲は晴れないまま、虹も出ないまま、語り手は、今ここで具体的に何をするかという決意を示すことはない (Goslee 124)。

I will not cease from Mental Fight,  
Nor shall my Sword sleep in my hand:  
Till we have built Jerusalem,  
In Englands green & pleasant Land.

この最後の連において、語り手は、最初の1行で、「われ精神の戦いを止めることなし」と宣言し、2行目では、そのためには剣を収めることなく、絶えまない努力をする決意を表明する。3行目においては、第2連の3行目の「エルサレムがここに築かれたのか」という受け身形とは対照的に、語り手は、「われらがエルサレムを築くまで」と能動的な建設を語る。ネヘミア記 (4:10-3) に見られる、働く意欲に満ちた民によるエルサレムの城壁の再建や、エズラ記 (5:2) における、預言者によるエルサレムの神殿工

事からイメージを借りていると思われる。また、1行目の‘I」「われ」という主語が3行目では‘we」「われら」に変わっていることは、たとえ、未来の予言ではあっても、語り手の個人の意志がイングランドの人々が共有するヴィジョンへと変化していることを示唆する (Goslee 124)。

2行目の「わが剣は手の中で眠ることなく」の剣は、コンテキストにおいて、詩人のペン、彫版師のビュラン(彫刻刀)の比喩でもあろう。語り手は、精神の戦いのための武器をもって、イングランドの人々に新エルサレム、つまり新しい人間の魂を入れる世界を建設すること、すなわち新しい芸術を創造するよう呼びかけていることになる。詩の後に、民数記においてモーゼがヨシュアに語る「わたしは、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」‘Would [to] God that all the Lords people were Prophets’ (11:29) が引用されている。<sup>6</sup> ここでも、一人の詩人や芸術家ではなく、すべての民が聖書の中の預言者のように聖なる力を付与され、「新世界の創造に加わるべきである」というブレイクの開かれたヴィジョンが示されている。この新たな都エルサレムには、ヨハネの黙示録にある (21:2)、キリストの花嫁のイメージが重なっている (Goslee 124)。最後の行、「イングランドの心地よい緑の地に」というのは、エコロジカルな読みも可能な自然描写だが、人々はそれを取り戻し、エルサレムを築くために自ら行動しなければならないと語られている。このように第4連は、孤独な詩人の「精神の戦い」が、すべての主の民が共有するヴィジョンとなり、現在の荒廃したエルサレムすなわちイングランドの悪や誤謬を正すことによって、すべての人が創造者になることを予言して終る (Damon 404)。つまり「精神の戦い」とは、現状を批判し、悔い改めを説き、将来を見通す聖なる預言であり、それはすなわちブレイクが考える芸術的創造行為に他ならない。

## II

1916年、パリーによって『ミルトン』の序歌に曲が付けられ、「エルサレム」と命名されて以来、現在まで種々の組織、団体によって、いろいろ

な機会に歌われてきたことはすでに述べた。この題名は、ブレイクの後期預言書の一つに『エルサレム』(*Jerusalem*)という長編詩があるので、混同されやすいが、俗称として現在まで使われている。

この曲の成立事情とその後どのように受容されていったかをまず見ていきたい。第一次世界大戦の真只中、1916年3月、パリーは、当時桂冠詩人だったRobert Bridges (1844–1930) から、『ミルトン』序歌に、「適当な、複雑でなく、聴衆がすぐに歌えるような」曲を作るよう依頼された(Dibble 483)。その目的は、インドやチベット遠征などで有名な軍人Francis Edward Younghusband (1863–1942) が組織した愛国主義的な団体「正義の戦い」(‘Fight for Right’)の決起集会で、予想外に長引いた第一次大戦に対する参加者およびイギリス国民の士気を鼓舞することだった。この団体は、「対ドイツへの戦意高揚、大国と小国間の平等と独立、侵略や安易な武力行使への予防措置、国家間の友好」などの大義の遂行を目標に掲げていた(Younghusband v–vii)。会員だったブリッジズの依頼で、パリーは、作曲を引き受けたようだ。Queen’s Hallでの初演では、300人の合唱団が、オルガンの伴奏で歌い、たちまち人気を博し、「正義の戦い」の大義を広めるという目的は見事達成された。その後Edward Elgarによって作曲されたオーケストラの伴奏曲が、しばしば演奏されることになる。もともと自由主義者で、好戦的な愛国主義に懐疑的だったパリーは、このような国威発揚、あるいは三国協定の正当性を宣伝する団体に疑問を抱き、やがて脱会した。<sup>7</sup>

一方、彼の曲は、「正義の戦い」のような保守的、愛国主義的な組織とは正反対の団体から自分たちのための歌として取り上げられることになった。1917年、婦人参政権運動の集会で、彼自身の指揮により女声合唱団によって歌われ、翌年には、彼の旧友で、有名な婦人参政権論者Dame Millicent Garrett Fawcett (1847–1929) から、参政権示威運動のためのコンサートで歌わせてほしい旨の依頼があった。その会の後、パリーは、彼女から、この歌は、婦人有権者の「賛美歌」にすべきだとの手紙を受け取っている(Benoliel 134)。彼は自分の曲が女性の参政権獲得に役立つことに非常に満

足した (Dibble 485)。

このように、パリー作曲の「エルサレム」という歌は、誕生当初から、愛国主義的団体と変革を目指す組織、左右両派によってそれぞれの運動にふさわしい歌として領有され、その後も、保守と革新、「ハイカルチャーとローカルチャー」(Lussier 155)、両方に受け入れられていった。ファーバーによると、この歌は、「イングランドとウェールズの第二の国歌、英国賛美歌集とパブリックスクールに不可欠のもの、プロムナードコンサート最終夜の最後の歌」であり、「婦人参政権論者、フェビアン协会会员、高教会派保守党员、長老派教会伝道者、アメリカの左翼」いずれにも同じように熱い思いをもって歌われてきた (82)。さらに、イギリスの地方都市の女性のための成人教育施設 (the Women's Institutes) が、1915 年に組織されたが、女性が参政権を得た後は、この組織の集会でも歌われるようになり、今でも続いている (Dibble 485)。ただし、現在これは、保守党の支持母体の一つである。また、この「エルサレム」という歌を最初に賛美歌として掲載したのは、1923 年、ケンブリッジ大学で組織された「学生キリスト教運動」が出版した『学生賛美歌集』(*Students' Hymnal*) で、1933 年には『英国賛美歌集』(*The English Hymnal*) に収められた。現在でもイギリスのパブリックスクールやアメリカの私立学校で歌われている (Ferber 88)。また 1926 年のゼネストの際に、炭鉱やその他の労働者によって歌われた一方、BBC 放送でボールドウィン首相が行ったスト終結宣言の終わりにこの曲が流された (Douglas 120)。1945 年には、選挙の勝利を祝って、労働党本部前で、また、アメリカでも労働組合や左翼によってデモや集会の折に歌われてきた。その他、社会主義や労働組合運動だけでなく、「女性のギルド」(the Women's Guild) や保守党によって、またユーロ 2000 サッカー・トーナメントでも歌われている (Clark and Worrall 2)。

映画の中でこの歌が印象的に使われているものに Hugh Hudson 監督の『炎のランナー』(原題 *Chariots of Fire*) と Derek Jarman 監督の『ジュビリー／聖なる年』(原題 *Jubilee*) がある。<sup>8</sup> この二つの映画は好対照をなし

ている。前者は、1920年代のイギリスで、オリンピックで走ることにによって栄光を勝ち取り、真のイギリス人になろうとするケンブリッジ大学のユダヤ人学生と、神のために走るというスコットランド人宣教師という二人のランナーの競争と友情を扱った伝記的映画である。権威主義的、排他的イギリスを描くと同時にイギリスの尊厳を描き、賛美歌「エルサレム」は、それを強調するように映画の冒頭シーンに流れる。後者の『ジュビリー』は、エリザベス1世が魔術によって現代のロンドンに降り立ち、そこに若者たちの強奪と暴力が繰り返される荒廃した街を見出すという現状批判が込められた映画である。このように、イギリスの伝統の護持という、国家主義的な姿勢と、そのような正統的なものを批判・破壊しようとする反逆的な態度という、相反する主張をそれぞれ強調するために、「エルサレム」が使われている。

以上見てきたように、『ミルトン』の序歌は「エルサレム」という歌として、愛国的とも革命的とも、また万人救済的であるとも解釈され、受容されてきた。賛美歌でありながら、フットボールの試合でも歌われ、相対立する政党がそれぞれ利用し、労働者と同時にパブリックスクールの生徒が歌う、というように多様な受け止められ方をしてきた。それぞれの時代に、イギリスの、あるいは世界の荒廃や不正を認め、自由の戦士として変革と再生のために戦おうとする、あるいは戦っていると信じる人々は、それぞれこの歌が自分たちの決意を具現していると考えた。I部で見たように、ブレイクの詩は、聖書からのイメージを用いて精神的戦い、すなわち想像力の解放と創造による贖いや救いを呼びかけ、イングランドにエルサレムを再建するという祈願と決意を語るものである。しかし一方、この詩の中に、狭隘な愛国主義的傾向、あるいはイングランドが選ばれた国であるという排他主義的な姿勢、さらにキリスト降誕の太古に理想郷を見出す懐古主義的な感覚を読み取ることも不可能ではない。この詩が、栄光ある古代イングランドという伝統への回帰と、精神の自由を保障する新しい理想郷の創造という両義性を持っていることは確かである。ブレイクがこの混同や両

義性を避けるために、最終的に序を削除したということも十分考えられる。

ブレイクの序文削除について、Susan Fox は、「その騒々しさが許しと改心という詩（『ミルトン』）全体の考え方」と矛盾するためだったと推測している（26）。一方、John Wain は、普通、詩に要求される論理と統語法により一定の意味を持つ自立したものであるなら、長い本篇から切り離してもよいと述べている（106）。いずれにしても、この序歌の後に続く詩『ミルトン』というテキストにおいて、地上に帰って来た詩人ミルトンの自己滅却によるイギリスの再生が語られるが、そのこと自体、イギリスの優位性を説く自国中心主義的な保守主義なのか、現実の批判に基づく革命的思想なのかをわれわれ読者は考えなければならない。その意味で、削除され、独立した歌となった詩の受容の変遷を検討することは、『ミルトン』という作品のみならず、ブレイクの想像力論や古典主義批判などを理解するうえでも重要な手掛かりを与えてくれる。

（本稿は、『イギリス・ロマン派講座——名詩の解釈と鑑賞』の講義「Blake: “And did those feet in ancient time” (Milton より)——愛国か反逆か」（6月6日於早稲田大学）に加筆修正を施したものである。）

#### 注

1 ブレイクの『ミルトン』（Milton）からの引用は、Essick, Robert N. and Joseph Viscomi, eds. *Milton a Poem* からである。「序」（Preface）は212-3 ページである。他の作品からの引用は、Erdman, David V., ed. *The Complete Poetry and Prose of William Blake* からである。

2 Bloom は、『復樂園』におけるイエスの主張「ギリシアは下手な模倣によって我々からこれらの芸術を引き出した」を引用している（909）。

3 青山 135-6 参照。

4 Damon 404、Bloom 910、Essick and Viscomi 34 参照。Bateson は、‘Mills’を第一義的には教会だとしている（8）。

5 ‘Mills’に関する Bateson と Wain の論争参照。

6 ミルトンも『アレオパジティカ』において、「主の民すべてが預言者になっているような」偉大な改革の時が来たように思われる（342-3）と述べ、聖書のこの箇所と言及している。

7 ‘Jerusalem’ という曲の成立事情に関しては、Dibble 483–5 および Benoliel 133–4 を参照。

8 この二つの映画に関しては、Mark Douglas の論文 ‘Queer Bedfellows: William Blake and Derek Jarman’ 参照。

# 引用文献

青山吉信 『グラストンベリ修道院 歴史と伝説』 (山川出版社、1992 年)

『聖書 新共同訳』

Barfoot, C. C. ‘Blake’s England and the Restoration of Jerusalem. Too late for Green and Pleasant Idylls?’ *Green and Pleasant Land*. Ed. Amanda Gilroy. Leuven: Peeters, 2004. 57–71.

Bateson, F. W. *English Poetry: A Critical Introduction*. London: Longman, 1966.

Benoliel, Bernard. *Parry before Jerusalem*. Aldershot: Ashgate, 1997.

Bentley, G. E., Jr. *Blake Books*. Oxford: Clarendon Press, 1977.

Clark, Steve, and David Worrall. ‘Introduction.’ *Blake, Nation and Empire*. Eds. Steve Clark and David Worrall. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2006. 1–19.

Damon, S. Foster. *William Blake: His Philosophy and Symbols*. London: Dawson’s of Pall Mall, 1969.

Dibble, Jeremy. C. *Hubert H. Parry: His Life and Music*. Oxford: Clarendon Press, 1992.

Douglas, Mark. ‘Queer Bedfellows: William Blake and Derek Jarman.’ *Blake, Modernity and Popular Culture*. Eds. Steve Clark and Jason Whittaker. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007. 113–126.

Erdman, David V., ed. *The Complete Poetry and Prose of William Blake*. Newly rev. ed. Commentary by Harold Bloom. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1982.

Essick, Robert N., and Joseph Viscomi, eds. *William Blake: Milton a Poem*. Princeton: Princeton University Press, 1998.

Ferber, Michael. ‘Blake’s “Jerusalem” as a Hymn.’ *Blake: An Illustrated Quarterly* 34 (2000/01): 82–94.

Fox, Susan. *Poetic Form in Blake’s Milton*. Princeton: Princeton University Press, 1976.

Goslee, Nancy Moore. “In England’s green & pleasant Land”: The Building of Vision in Blake’s Stanzas from *Milton*.’ *Studies in Romanticism* 13 (1974): 105–25.

*The Holy Bible*. Authorized King James Version.

Lussier, Mark. ‘Blake beyond Postmodernity.’ *Blake, Modernity and Popular Culture*. Eds. Steve Clark and Jason Whittaker. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007. 151–162.

Milton, John. *Paradise Lost. The Poetical Works of John Milton*. 2 vols. Ed. Helen Darbishire. Oxford: Clarendon Press, 1973.



——. *Areopagitica; for the Liberty of Unlicenc'd Printing*. Ed. William Haller. *The Works of John Milton*. Vol. IV. New York: Columbia University Press, 1931. 293–354.

Wain, John. ““Intention” and Blake’s *Jerusalem*.” *Essays in Criticism* 2 (1952): 105–14.

Youngusband, Francis Edward. ‘Preface.’ *For the Right: Essays and Addresses by Members of The “Fight for Right Movement.”* London: T. Fisher Unwin, 1916. v–viii.